

事例番号:320261

原因分析報告書要約版

産科医療補償制度
原因分析委員会第七部会

1. 事例の概要

1) 妊産婦等に関する情報

経産婦

2) 今回の妊娠経過

特記事項なし

3) 分娩のための入院時の状況

妊娠 39 週 6 日

14:50 陣痛発来のため搬送元分娩機関を受診、胎児心拍数陣痛図で胎児頻脈を認める

15:27 頃- 胎児心拍数陣痛図上軽度遷延一過性徐脈出現

16:17 胎児機能不全、母体高熱があり当該分娩機関に母体搬送され入院

4) 分娩経過

妊娠 39 週 6 日

16:26- 胎児心拍数陣痛図上高度遷延一過性徐脈が頻回に出現

18:14 胎児機能不全、子宮内感染、前期破水の診断で帝王切開により児娩出

胎児付属物所見 臍帯巻絡(頸部 1 回)、羊水量 150mL、胎盤病理組織学検査で絨毛膜羊膜炎の所見(stage III)、臍帯にも炎症が波及した所見

5) 新生児期の経過

(1) 在胎週数:39 週 6 日

(2) 出生時体重:3300g 台

- (3) 臍帯動脈血ガス分析:pH 6.91、BE -17.8mmol/L
- (4) アプガースコア:生後1分0点、生後5分4点
- (5) 新生児蘇生:人工呼吸(バッグ・マスク)、気管挿管、胸骨圧迫、アドレナリン注射液投与
- (6) 診断等:
出生当日 低酸素性虚血性脳症
- (7) 頭部画像所見:
生後17日 頭部MRIで低酸素性虚血性脳症の所見を認める

6) 診療体制等に関する情報

<搬送元分娩機関>

- (1) 施設区分:診療所
- (2) 関わった医療スタッフの数
医師:産科医1名
看護スタッフ:助産師2名、看護師1名、准看護師2名

<当該分娩機関>

- (1) 施設区分:病院
- (2) 関わった医療スタッフの数
医師:産科医2名、小児科医2名、麻酔科医2名
看護スタッフ:助産師2名、看護師2名

2. 脳性麻痺発症の原因

- (1) 脳性麻痺発症の原因は、分娩経過中に生じた胎児低酸素・酸血症により低酸素性虚血性脳症を発症したことであると考ええる。
- (2) 胎児低酸素・酸血症の原因は、臍帯圧迫による臍帯血流障害の可能性が有る。
- (3) 子宮内感染が脳性麻痺発症の増悪因子となった可能性が高い。
- (4) 胎児は、分娩開始後から低酸素の状態となり、その状態が出生時まで進行し低酸素・酸血症に至ったと考える。

3. 臨床経過に関する医学的評価(2020年4月改定の表現を使用)

1) 妊娠経過

妊娠中の管理は一般的である。

2) 分娩経過

- (1) 妊娠 39 週 6 日陣痛発来を主訴に搬送元分娩機関を受診した妊産婦への対応(内診、分娩監視装置装着、抗菌薬投与、「原因分析に係る質問事項および回答書」によると胎児機能不全・母体高熱の適応で当該分娩機関に母体搬送)は一般的である。
- (2) 当該分娩機関到着後の対応(バイタルサイン測定、分娩監視装置装着、酸素投与、膣分泌物培養検査・細菌培養検査・血液検査実施、輸液、内診、破水の検査実施、超音波断層法施行、子宮収縮抑制薬投与)は一般的である。
- (3) 診療録の記載によると、妊娠 39 週 6 日 17 時 3 分に「胎児機能不全、母体発熱、前期破水を認めたことから帝王切開」と判断したことは一般的である。
- (4) 帝王切開決定(「原因分析に係る質問事項および回答書」によると 17 時前から約 1 時間 14 分で児を娩出したことは一般的である。
- (5) 胎盤病理組織学検査を実施したことは適確である。
- (6) 臍帯動脈血ガス分析を実施したことは一般的である。

3) 新生児経過

新生児蘇生(バッグ・マスクによる人工呼吸、気管挿管、胸骨圧迫、アドレナリン注射液投与)および当該分娩機関 NICU 管理としたことは一般的である。

4. 今後の産科医療の質の向上のために検討すべき事項

1) 搬送元分娩機関および当該分娩機関における診療行為について検討すべき事項

(1) 搬送元分娩機関

診療録の記載と家族からみた経過に一致しない点が散見されるため、医療スタッフは妊産婦や家族とより円滑なコミュニケーションが行えるよう努力することが望まれる。

(2) 当該分娩機関

なし。

2) 搬送元分娩機関および当該分娩機関における設備や診療体制について検討すべき事項

(1) 搬送元分娩機関

なし。

(2) 当該分娩機関

事例検討を行うことが望まれる。

【解説】 児が重度の新生児仮死で出生した場合や重篤な結果がもたらされた場合は、その原因検索や今後の改善策等について院内で事例検討を行うことが重要である。

3) わが国における産科医療について検討すべき事項

(1) 学会・職能団体に対して

なし。

(2) 国・地方自治体に対して

なし。